

地域情報（県別）

【兵庫】「市民皆が評価された」2025年度へき地医療貢献者表彰を受賞-佐竹信祐・公立宍粟総合病院院長に聞く◆Vol.1

市内唯一の病院として救急・周産期・小児医療に尽力

2025年12月15日(月)配信 m3.com地域版

公立宍粟総合病院（兵庫県宍粟市）の佐竹信祐院長が2025年9月、全国自治体病院協議会が主催する「へき地医療貢献者表彰」を受賞した。医療資源が不足する宍粟市で約21年にわたって継続してきた活動が評価された。宍粟市では行政や市民が地域医療を守ろうと積極的に活動しており、佐竹氏はその姿に感化されてきたという。「宍粟市の皆さんのが評価された結果」と受賞の感想を話す佐竹氏に、半生を振り返ってもらった。（2025年11月6日オンラインインタビュー、計3回連載の1回目）

▼第2回はこちら

▼第3回はこちら



へき地医療貢献者表彰伝達式で、表彰状を受け取る佐竹信祐氏（病院提供）

——佐竹先生は2025年9月、全国自治体病院協議会が主催する「へき地医療貢献者表彰」を受賞しました。まずは、受賞の知らせを聞いたときのお気持ちをお聞かせください。

私個人というより、宍粟市の皆さんのが評価された結果だと思いました。宍粟市は兵庫県の自治体では2番目に面積が大きく、山林が約8割を占めます。病院は当院のみであり、当院から半径10キロメートルに他の病院はありません。つまり、とても広い地域をごく少数の医療機関でカバーしており、当院が地域医療を支えなければ文字通り医療が崩壊する危機的な状況にあります。市民の皆さんもそれを肌で感じており、「何としても守らなくてはいけない」という強い意志をお持ちです。

2013年から市長を務めておられる福元晶三市長が尽力されているほか、市民が地域医療を支援するための有志団体を設立して活動されており、また当院でのボランティアにも積極的に参加していただいている。そんな姿に私たちも感化され、これまで頑張ることができました。

渡辺淳一の小説に影響「凛とした外科医に憧れた」

——市民の主体性にも背中を押されてきたのですね。先生は1982年に神戸大学医学部を卒業しました。なぜ、医師を志したのですか。

私は兵庫県丹波市の出身で、歯科医師の家に生まれました。長男だったので小さな頃はぼんやりと父と同じ仕事をするのだろうと思っていましたが、医師が登場する小説やテレビドラマに触れるうち、医師に憧れるようになりました。中でも影響を受けたのは、渡辺淳一さんの小説です。医師である渡辺さんが描く外科医が凛としていて、とても格好よく見えました。家業を継ぐ道を断ってまで医学部を受験することに抵抗もありましたが、最終的には親も認めてくれて。結果的に、家業は次男が継いでくれました。

——資料によると、先生は消化器外科を専門にされてきたようですね。

大学を卒業後、神戸大学医学部附属病院の第二外科に入局しました。当時の神戸大の外科は今のように臓器別に分かれてはおらず、第二外科は心臓外科や呼吸器外科、小児外科、消化器外科、乳腺外科などを扱う総合外科のような立ち位置でした。私も複数の外科の診療に携わりましたが、中でも専門的に学びたいと思ったのが、消化器外科でした。

それというのも、市中病院で最も症例数の多かったのが消化器外科だったためです。虫垂炎や胆囊炎など比較的よく見られる疾患のほかに消化器がんも扱うため、「最も求められる分野に注力しよう」と大学の後に勤務した城陽江尻病院時代の頃から、消化器の手術を主に担当させていただくようになりました。

宍粟総合病院入職後は外科部長として腹腔鏡手術を推進

——城陽江尻病院、兵庫中央病院などを経て、2004年に公立宍粟総合病院に外科部長として入職します。

公立宍粟総合病院は神戸大第二外科の関連施設だったため、医局の人事で異動しました。この病院に勤めるのは3度目で、最初は研修医時代に1年間、大学にいた頃も出向で1年近く在籍していたので、私にとってはなじみのある職場でした。違うのは、「外科部長」という役職になったことです。外科チームを統率する役割を担うため、「リーダーとして職責を果たさなければ」という使命感がありました。

それと同時に、時代に合った外科治療の普及も大きなモチベーションでした。ちょうど消化器外科の手術方法が変遷を遂げている時期で、特に大病院では腹腔鏡手術を推進していました。当時の公立宍粟総合病院ではまだあまり行われていなかった一方、私は兵庫中央病院でこの手術も経験していたので、院内の外科治療のアップデートは赴任して間もない頃のミッションでした。当院における消化器の手術は現在、多くが腹腔鏡下で行われており、その意味では先陣を切れたように思います。

救急応需率が50%台から80%台へ、年1300件受ける

——先生は外科部長の後に、診療部長、地域連携室長、副院長を歴任し、2018年に院長に就任します。今回の受賞では、院長としての采配が大きく評価された印象を受けます。

院長としては常に、「地域に求められる医療」をテーマに掲げてきました。とりわけ、救急医療と周産期医療、小児医療の3つに注力してきました。私が院長に就任した2018年はまだ地域医療の貢献では足りていないことも複数ありました。その中で最も大きかったのが、救急医療です。地域の人たちの最大関心事はやはり救急なんですね。市民が地域に求めている医療機関は「急病時に診てもらえる病院」であり、当院の半径10キロメートル以内に他の病院はないので、当院が断れば地域の人は行き場をなくしてしまいます。断るわけにはいきません。

そこで、「どうすれば断らずに受け入れられるだろうか」と思案して2019年にある対策を取ったところ（Vol.2で詳述）、同年に救急搬送が1000件を超えた、それまで50%くらいだった救急搬送応需率が80%を超えるました。近年の搬送件数は年間1300件ほどで、応需率も80%台後半を維持しています。目標は90%ですが、救急医療の充実化は市民の皆さんにとても評価されていると感じています。

◆佐竹 信祐（さてけ・しんすけ）氏

1982年神戸大学医学部卒。神戸大学医学部附属病院、城陽江尻病院、兵庫中央病院などを経て2004年に公立宍粟総合病院に入職。外科部長、診療部長、地域連携室長、副院長を歴任し、2018年から同院院長。日本外科学会専門医・指導医、

日本消化器外科学会専門医・指導医、日本消化器内視鏡学会専門医・指導医、日本消化器病学会専門医など。

【取材・文=医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

